

【教科書 P66 練習 20】 (なぜ「同じ平面上にないから」の一言を書く必要があるのか)

授業での板書を再掲します (一部省略).

.....
 点 M は直線 OH 上にあるので...

$$\vec{OM} = k\vec{a} + k\vec{b} + 2k\vec{c} \quad \dots \textcircled{1}$$

また, 点 M は平面 AFC 上にあるので...

$$\vec{OM} = (1-s-t)\vec{a} + t\vec{b} + (s+t)\vec{c} \quad \dots \textcircled{2}$$

3点O, A, B, Cは同じ平面上の点ではないので, ①と②の $\vec{a}, \vec{b}, \vec{c}$ の係数を比較することで,

$$\begin{cases} k = 1 - s - t \\ k = t \\ 2k = s + t \end{cases}$$

を得る. これを解くと $k = \frac{1}{3}$ となるから,

$$\vec{OM} = \frac{1}{3}\vec{a} + \frac{1}{3}\vec{b} + \frac{2}{3}\vec{c} \quad \dots (\text{答})$$

.....
 授業では下線部「3点O, A, B, Cは同じ平面上の点ではない」については詳しく触れませんでした. なぜこの一言を書かねばならないのか, 考察してみましょう. ところで, 上の解答で実は誤魔化して記述した点があります. 波線部分「①と②の $\vec{a}, \vec{b}, \vec{c}$ の係数を比較することで」の部分です. まずはここを誤魔化せずに (省略せずに) 記述してみることから始めてみます.

波線部分の「省略しない」記述

①と②より,

$$\begin{aligned} k\vec{a} + k\vec{b} + 2k\vec{c} &= (1-s-t)\vec{a} + t\vec{b} + (s+t)\vec{c} \\ \iff \{k - (1-s-t)\}\vec{a} + (k-t)\vec{b} + \{2k - (s+t)\}\vec{c} &= \vec{0} \end{aligned}$$

右辺がゼロベクトルということは, 左辺の $\vec{a}, \vec{b}, \vec{c}$ の係数は 0 だから,

$$\begin{cases} k - (1-s-t) = 0 \\ k - t = 0 \\ 2k - (s+t) = 0 \end{cases} \iff \begin{cases} k = 1 - s - t \\ k = t \\ 2k = s + t \end{cases}$$

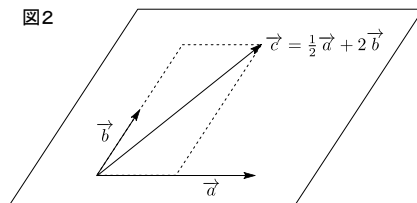
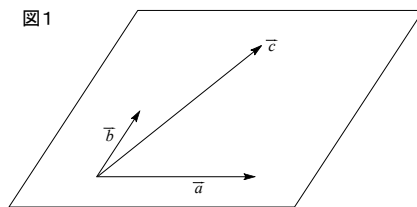
となります. このように記述し直すと, 気になる点が一つあります. それは,

「右辺がゼロベクトルということは, 左辺の $\vec{a}, \vec{b}, \vec{c}$ の係数は 0」

と言い切っている点です. $k - (1-s-t) = x, k - t = y, 2k - (s+t) = z$ と文字を置き換えて論理記号を用いて記述し直せば,

$$x\vec{a} + y\vec{b} + z\vec{c} = \vec{0} \implies x = y = z = 0$$

と言い切っている、ということです。右辺がゼロベクトルなら左辺の係数らは必ず0… と言い切れるでしょうか？他の可能性はないでしょうか？…実はこれは言い切れません！反例はすぐに見つかります。 $\vec{a}, \vec{b}, \vec{c}$ が、同じ平面上にある ときを想像してみましょう（図1）。図1において、 $\vec{c} = \frac{1}{2}\vec{a} + 2\vec{b} \iff \frac{1}{2}\vec{a} + 2\vec{b} - \vec{c} = \vec{0}$ と表せますから（図2）、 $x\vec{a} + y\vec{b} + z\vec{c} = \vec{0}$ をみたく x, y, z として（ $x = y = z = 0$ 以外にも） $x = \frac{1}{2}, y = 2, z = -1$ が挙げられることになります。 $x = y = z = 0$ とは限りません！このことから、係数が0（ $x = y = z = 0$ ）と結論するためには、「 $\vec{a}, \vec{b}, \vec{c}$ が、同じ平面上にない」と宣言しなくてはならないことが感じてもらえると思います。



* * *

「感じる」だけでは納得いかない人は以下を読んで下さい。まず言葉を定義します。

$$x\vec{a} + y\vec{b} + z\vec{c} = \vec{0} \implies x = y = z = 0$$

が成り立つとき、

$$\vec{a}, \vec{b}, \vec{c} \text{ は一次独立である}$$

といいます。この言葉を使うと、上のモンダイは結局

$$\vec{a}, \vec{b}, \vec{c} \text{ が同一平面上にない} \implies \vec{a}, \vec{b}, \vec{c} \text{ が一次独立}$$

が成り立つかどうかを確かめたい、と言い換えられます。これを証明してみましょう。

しかしながら、このままでは証明しづらいので、対偶をとって考えます：

$$\vec{a}, \vec{b}, \vec{c} \text{ が一次独立でない} \implies \vec{a}, \vec{b}, \vec{c} \text{ が同一平面上にある}$$

以下、証明。

【証明】 仮定より、 $\vec{a}, \vec{b}, \vec{c}$ が一次独立でないから、 $x\vec{a} + y\vec{b} + z\vec{c} = \vec{0}$ において $x = y = z = 0$ 以外の (x, y, z) が存在する。ここでは仮に $x \neq 0$ とする。すると、 x は0でないから x で割ることができて、

$$x\vec{a} + y\vec{b} + z\vec{c} = \vec{0} \iff \vec{a} = -\frac{y}{x}\vec{b} - \frac{z}{x}\vec{c}$$

と変形することができる。 \vec{a} が、 \vec{b} と \vec{c} を伸び縮みさせたものの和¹⁾として表せる、ということは $\vec{a}, \vec{b}, \vec{c}$ が同一平面上のベクトルであるということに他ならない。（証明終）

* * *

¹⁾これを1次結合または線形結合といいます

ちなみに,

$$\vec{a}, \vec{b}, \vec{c} \text{が同一平面上にない} \implies \vec{a}, \vec{b}, \vec{c} \text{が一次独立}$$

は逆も成り立ちます. すなわち,

$$\vec{a}, \vec{b}, \vec{c} \text{が同一平面上にない} \iff \vec{a}, \vec{b}, \vec{c} \text{が一次独立}$$

が成り立ちます. 興味ある人は逆の証明もしてみてください. また, ここまでの話の次元を一つ下げると (平面ベクトルに戻すと),

$$\vec{a}, \vec{b} \text{が平行でない} \iff \vec{a}, \vec{b} \text{が一次独立}$$

となります. 証明は上と同様にしてできます.